BUILT ON

小柳建設と街の人たちをつなぐ
CSRレポート2012

その工事は、誰のために
なっているのだろう?

BUILT ON
発行・編集 (2012年4月1日発行) 小柳建設株式会社 〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL 0256-32-0006

平成23年品木ダム浚渫（しゅんせつ）工事

ひとつとして同じ場所はない浚渫現場の経験が、日本で唯一のダムで活きた。

堆積物の多い特異なダムを、濁さずに浚渫する。

白根山より流れ出る大地の恵みは、草津温泉として、長い間、多くの人の疲れを癒してきた。しかし、強い酸性であるがゆえ、温泉が集まり流れていく吾妻川は、古くより「死の川」と呼ばれ、生物が育たない川と言われていた。

１９６４年、群馬県は世界初の「河川酸性化中和事業」の中心の１つとして、河川水の中性化を目的に、又、これに付随して水力発電を行う「品木ダム」と「中和工場（石灰投入施設）」を完成させた（その後、この中和事業は国土交通省に引き継がれた）。吾妻川の水質は大幅に改善。現在では、魚類も生息するまでになった。しかし、一方で品木ダムでは、休む事なく中和剤として投入される石灰による中和生成物と山から流入する土砂により堆砂が著しく進行する。堆砂容量を確保するために浚渫を毎年実施している。もちろん、そのまま浚渫を行おうとすると、ダム底の堆積物が水中で舞上り、濁してしまう。堆積物の多い特異なダムをどうすれば、濁さずに浚渫できるか。まさに技術者の腕の見せ所だ。

「通常はウチの浚渫船を使うんですけど、この工事は、発注者（国土交通省関東地方整備局 品木ダム水質管理所）より貸与して頂いたグラブ浚渫船「草津」と土砂圧送船を用いて施工する設計になっている。どう濁させないかと考えた結果、堆積物をグラブでツカミ上げる周囲に汚濁防止枠と取水する周囲に汚濁防止膜（シルトフェンス）を張ることにしたんです」（小柳建設環境保全事業部課長・小林敬行）。こうすることで、濁の拡散を最小限に防ぐことができるだけでなく、作業の効率が格段に上がる。さらに、浚渫船にGPSと併せて情報化施工システムを設置することで、作業者が今、どの位置の浚渫を行い、どの深さに仕上がっているかを正確に把握できるようにした。

グラブでツカミ上げた堆積物（浚渫物）は、ブースターポンプ（中継ポンプ）を経由して脱水プラント（フィルタープレス）で水分を絞った後に、土質改良ヤードに運搬し、固化処理（セメントを混合し土を固める）後に土捨場に盛土される。

これらの工夫は、常にどんな浚渫現場にも臨機応変に対応できる技術力が土台になっている。

「ダムも河川も湖沼も同じ条件の現場は、ひとつとしてない。深さも土質も現場環境や工事の目的も全部違う。だからその都度調査して、そこにあわせて浚渫船も設備も組み合わせている（一般の浚渫工事の場合）。それらの経験が品木ダムでも活きました」（小林）。

東京をはじめ、日本全国の多くの浚渫を手がけてきた経験が、技術力をより強くしている。

小林 敬行
小柳建設（株）環境保全事業部 課長

一番苦労したのは、やはり軟泥状の堆積物の多さですね。汚濁に気を遣う現場は初めてではありませんので、あまり気にはなりませんでしたが、浚渫した後から周りの堆積物で埋め戻されそうになってしまうことでした。浚渫期間中はみんなで合宿。男性ばかりなので部活のような雰囲気です（笑）。

【品木ダムの浚渫の流れ】

① 浚渫状況。（グラブ浚渫船「草津」、土砂圧送船）

② 手前のパイプから浚渫物を圧送。

③ 落ち葉や夾雑物を取り除き、浚渫物を脱水機場へ。（ブースターポンプ）

④ 水分を減らす。（脱水機＝フィルタープレス）

⑤ 水分を減らした浚渫物を土質改良ヤードへ。

⑥ 土質改良（セメント固化）を行う。

⑦ 土捨場に盛土。

・グラブ浚渫船「草津」：国土交通省関東地方整備局品木ダム水質管理所 所有
・土砂圧送船：国土交通省関東地方整備局 所有

平成23年品木ダム浚渫工事（2011.6.29～2012.3.31）群馬県吾妻郡中之条町

CONTENTS

04 困っている人がいる。だから日本全国、どこへでも行く。
震災翌日。ありったけの物資を詰め込んで、被災地へ向かった。

06 人を助けるために。誰かがすぐに立ち上がらなきゃ。
スピードアップとコスト削減を実現した環境に優しい土木工事。

08 伐採した木が、新たな生命を生み出す独自の緑化工法。

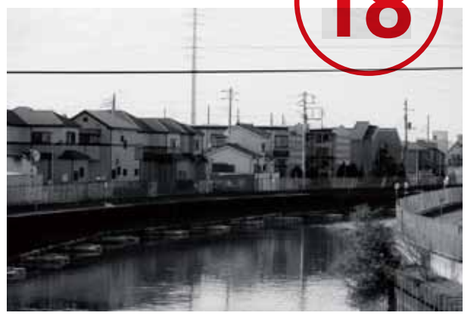
コスト削減と廃棄物ゼロを実現する「イソイル緑化工法」。

10 近隣住民の悩みを解消するため。さまざまな制約の中で、期待に応えていく。
駅前という立地、住宅街の中だからこそ第三者への最大の配慮を。

13 毎日使う人がいる。だから工事は1日でも早く終えたい。
手掘りでつくられた狭いトンネル（ずい道）。補修工事も人の手。

16 近隣住民の方との付き合い方は、なによりも約束を守ること。
掘り起こすと現れた予想外の解体くず。処理をしながらでも、工期は守る。

18 河川だけでなく、そこに住む人の心もクリーンに。
浚渫（しゅんせつ）工事は、現場以外のところで工事の価値が問われている。



21 ガソリンスタンドの工事は、難解なパズルだ。
制約の多いガソリンスタンドの工事をスムーズに進める極意。

22 新潟の小さな町で20周年。支えてくれた地元の人たちへの「ありがとう」。
いつもは厳しいプール場内が、1日中笑顔であふれた日。

25 雪が積もれば即出動。年末年始、曜日は関係なし。
朝の通勤渋滞までに除雪する。深夜の格闘がはじまる。

14 街に、人に貢献するための社内での取り組み〈1〉

26 街に、人に貢献するための社内での取り組み〈2〉

01

東日本大震災災害派遣・新燃岳噴火災害地域支援ボランティア

困っている人がいる。だから日本全国、どこへでも行く。

東日本大震災災害派遣（2011.3.12〜4.30）

震災翌日。ありったけの物資を詰め込んで、被災地へ向かった。

3月11日。伊藤智克（小柳建設舗道事業部課長）は、その揺れを加茂市にある事務所で感じた。新潟県内で震度4。しかし、なかなかおさまらない揺れに、瞬間的に「災害復旧支援が必要だ」。と感じたと言う。中越地震を教訓に、震度4以上の地震の場合、社内ではすぐに災害対策室を設置することになっている。千刈事務所が本部になった。翌日、照明車両とポンプ車、そして、2トン車に、飲料水や仮設のトイレ、燃料などありったけの支援物資を詰め込んで、急いで被災地に向かった。随時、国交省と連絡を取り合い、支援先を模索。福島、岩手を経由し、数日間かけてやっとのことで仙台へ到着したときは、津波によって起こった火災の影響で、油の臭いが充満していた。「まるで戦争映画。本当に何もないんです」（伊藤）。ガレキの撤去作業や陸に残った水を排水する作業を夜通し3交代制で進めた。2日間もすると、鼻が臭いに慣れ、マスクなしでも作業できるようになっていた。しかし、救援物資は被災者にさえ届かない過酷な状況。「初期の頃はクルマで寝泊まり。もちろん風呂にも入れません」（伊藤）。作業は3日間が精神的にも限度。その都度、新潟から向かう社員が、またありったけの荷物を詰め込んで、被災地に入る。復旧活動は4月いっぱいまで続いた。「毎日、国交省と打ち合わせして、今何ができるか、何をすべきか話し合いました。原子力発電所の水素爆発の時も、私たちは撤退しないと決めて、被災地に残りました。人のために働く。それが建設業だと思いますから」（伊藤）。活動を通して、建設業に携わるものとしての責任を、強く再認識したと言う。

一方、約1ヶ月前の2月17日。新燃岳噴火の災害復旧支援のために、桑原淳徳（小柳建設舗道事業部係長）と小柳建設のグループ会社である北陸維持サービスの係員中村義樹は、噴煙による火山灰除去のため、トラックにロードスイーパーを載せ宮崎へ向かっている。毎日、道路での作業。遠く新潟から来た2名を、地元は大いに歓迎してくれた。「地元のテレビ局に取材もされたんです。本当にみんな良くしてくれて、毎日差し入れを持ってきてくれる人もいたんですよ」（桑原）。灰は1日で大型ダンプ4、5台分にもなった。作業終了日はくしくも東日本大震災当日。翌日、宮崎県都城土木事務所による式典が予定されていたが丁重にお断りし、すぐさま荷物を積んで帰った。「後日、宮崎県都城土木事務所のみなさんから色紙が届いたんですよ。人のために働くことの意義深さを再認識しました」（桑原）。

建設業に携わる者として、人の役に立つことをする。一人ひとりがその想いをまっとうしようと、今日もあらゆる現場で動いている。

桑原 淳徳
小柳建設（株）舗道事業部 係長
〈新燃岳噴火災害支援へ参加〉

新燃岳からは3日に1回、噴煙が出ている状態でした。都城土木事務所や一緒に作業をしてくれた新栄産業のみなさんには本当にお世話になりました。また機会があればぜひ行きたいですね。

伊藤 智克
小柳建設（株）舗道事業部 課長
〈東日本大震災災害派遣へ参加〉

極限的な状況の中で、国土交通省の職員や全国から集まった同じ建設会社のみなさんなど、多くの人が復旧作業のために日々、知恵を出し合っていました。モノをつくるだけじゃなく、人を助けるのも建設業なんだと再認識しました。

一級河川五十嵐川河川災害復旧応急仮工事

人を助けるために。誰かがすぐに立ち上がらなきゃ。

スピードアップとコスト削減を実現した環境に優しい土木工事。

新潟県三条市内を流れる五十嵐川。２０１１年７月28日から29日にかけての記録的な豪雨で、大規模な災害を引き起こした。当時１時間あたりの降水量は、最大で加茂市の９３・５ミリ。これは新潟地方気象台の観測史上、十日町市の１２１ミリに次いで、２番目の記録となった。避難勧告は三条市で約３４，０００世帯に出された。

自然は予想もつかないことを起こす。「２００４年の豪雨の時はここは何でもなかった。だから、まず最初に現場に来た時に被害が大きくて、びっくりしたよ」（小柳建設土木事業部次長・金井正昭）。橋から下流にかけて、流れに沿ってゆるやかに左へ曲がっている道は、激しい流れのせいで、大きくえぐられていた。道沿いにあったタバコ屋は建物の基礎を残して跡形もなくなっていた。幸い、住民は避難しており、無事だった。

新潟県の動きは早かった。復旧方針は即日で決まり、金井は早速、現場に足を運び、工事計画を描いた。まず川の流れを変えて、土砂を掘り出す。そして、掘り出した土砂は新たな堤防づくりに使用する。こうすることで、コストが削減できるだけでなく、工事のスピードも早まり、資源もムダなく利用できた。また川底いっぱいに溜まった大きな石は、網にまとめて堤防強化に利用した。その重さは1袋2トンもあった。

「水が落ち着くまで工事は手が出せない。だから被害の5日後じゃないと工事を始められなかった。でも早くこの道をなんとかしないと、住んでいる人は困るでしょ。だからこっちも必死だったよね」（金井）。記録的な豪雨の現場を国土交通大臣も訪れた。被害の甚大さを物語っている。できる限り早く工事を終えるために、お盆までは1日16時間の過酷な工事が続いた。協力会社も全面的なバックアップ体制を敷いてくれた。「だって、人が困ってんだから。お盆で里帰りする人もいるでしょ。気合いだよ。気合い」（金井）。

できあがった新しい堤防は３５０ｍ。1日でガードレールを取り付け、舗装を仕上げた。復旧作業は約3週間。金井をはじめ、現場で作業にあたった男たちの顔は責任ある仕事をやり抜いた充実感に満ちていた。

一級河川五十嵐川河川災害復旧応急仮工事（2011.8.4〜2012.1.20）

金井 正昭
小柳建設(株) 土木事業部 次長

現場代理人として、8月4日から復旧工事に入りました。お盆前までは朝6時〜22時まで交代で工事を進めました。これも、ここに住んでいる人のため。私たちが休んだらそれだけ復旧が遅れますからね。スピードと質をできる限り追求しました。おかげさまで3週間ほどで復旧作業を終えることができました。

堤防を補強する袋詰玉石は1880個用意。

堤防は31000㎥の現地土砂を利用。

手前の基礎がわずかに残っている場所がタバコ屋があった場所。

今滝冬鳥越線小貫工区林道開設工事（イソイル緑化工法）

伐採した木が、新たな生命を生み出す独自の緑化工法。

コスト削減と廃棄物ゼロを実現する「イソイル緑化工法」。

建設会社は生活や地域の発展に欠かせない道路、森林を管理するための林道とさまざまな道路開設に携わる機会が多い。

その道路を開設する過程で、山々を必要最小限に切り開かなければならない。切り開いた土の斜面（法面）は放っておいたら、風化、浸食を繰り返し、いずれは崩壊してしまう。その為、法面を緑化などで保護する工事が行われる。「従来の方法は、緑化するためにわざわざ植生基盤材（バーク堆肥）というものを購入していたんですよ。でも、もともとの緑に返すわけだから、現場で廃棄物となってしまう木の根っこ（根株）を使えないかと」（小柳建設環境保全事業部次長・井出光）。その発想がイソイル緑化工法と呼ばれる独自の技術の開発につながった。これらの工事では、伐開した際に発生する根株の処理に困っていた。その根株をチップ状に加工、植物の生育基盤として活用、但し、生木では植物は育たないため、海藻ミネラルと微生物資材、さらにグリーン購入法で活用推奨されている汚泥発酵肥料と種子を混合し、法面に吹きつけていく。

もちろん、初めからこの技術開発がうまくいったわけではなかった。ポイントは海藻ミネラルによる保水効果、栄養補充。さまざまな試行錯誤の末に、これを加えることを発見し、技術の確信を得た。さらに、吹きつけ時の「ムラ」がないことも、まんべんなく緑化できる秘訣だ。吹付機に材料を供給するミキシングホッパーと呼ばれる機材も独自で開発した。そのため、根株のチップを生木のまま、これらの一連作業を同一現場内で行う事が可能に。産業廃棄物ゼロ「ゼロエミッション」を実現。同時にコスト削減も実現した。

施工した現場を数年後に通ると、どこを施工したのかわからない。その地域の草や木の植生遷移が行われているからだ。誰もが、工事により人工的に植生が行われたとは思えないほどの豊かさに驚かされる。「私たちは、もともとその地にいた草や木が自生する手助けをしているだけなんです」（井出）。自然の力を引き出すための技術力に、さらなる磨きをかけ続けている。

今滝冬鳥越線小貫工区林道開設工事（イソイル緑化工法）（2011.3.15～9.30） 新潟県加茂市

井出 光
小柳建設(株) 環境保全事業部 次長

もともと従来の緑化工法では伐採した木の根株は、産業廃棄物としての処理をせざるを得ませんでした。現場で伐採せざるを得なかった木をその場で加工して、山に戻すことができれば、木も幸せだろうし、ゴミも出ないし、費用も削減できる。この技術をもっといろんな場所で活かしていきたいですね。

【イソイル緑化工法の大きな流れ】

① 工事の現場で出た幹・枝・根株を砕き、チップ加工します。

② 緑化基礎工（手前茶色部分）を行い、ミキシングホッパーでチップを均一に攪拌しながら、モルタルコンクリート吹付機に安定供給します。

③ モルタルコンクリート吹付機で材料をさらに混合し、吹きつけます。

④ 吹き付け後、徐々に植物が発生します。

0四　石神井川浚渫（しゅんせつ）工事

近隣住民の悩みを解消するため。さまざまな制約の中で、期待に応えていく。

駅前という立地、住宅街の中だからこそ第三者への最大の配慮を。

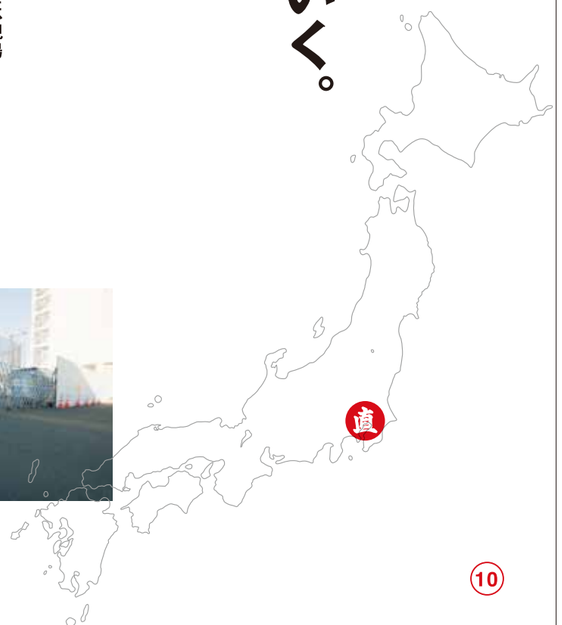
東京都北区王子駅をまたいで流れる石神井川。夏場になると川から発せられる悪臭に、近隣住民は毎年のように悩まされていた。原因は川の奥底に沈んでいるヘドロであった。これらの区民の悩みに対して北区役所が本格的に動き始めた。この浚渫工事を請け負ったのが小柳建設である。「多くの制約をクリアしていくことに苦労しましたね」（小柳建設環境保全事業部主任・加藤康之）。

工事現場のスペースの制約が最初の課題であった。仮設の計画段階で加藤の頭を悩ませた。工事作業ヤードを駅前のロータリーに設営し、スペースの狭い川沿いに水槽や水処理機を設置した。そのため、浚渫船を川に降ろすためのクレーンを配置するのも一苦労であった。クレーンの能力と船の重量を考慮しながら無事に大きな船を川の中へ設置できた。

また、今回の現場は駅前ということもあり、周辺に住宅や商業施設も多く存在し、一般の方の往来が多い場所であった。そのため、加藤は工事車両が出入りをする時は、第三者（一般者）を最優先するように徹底した。また、現場の仮囲いの壁にも通りがかりの人が見える位置に自作の工事内容説明のポスターをつくった。「以前、学生が通りかかったときに工事の看板を見て『シュンセツって何だろうね』という会話が聞こえました。石神井川沿いの歩道を歩いている人に、何の工事をしていて、工事をするとどうなるのかをきちんと説明したいですからね」（加藤）。

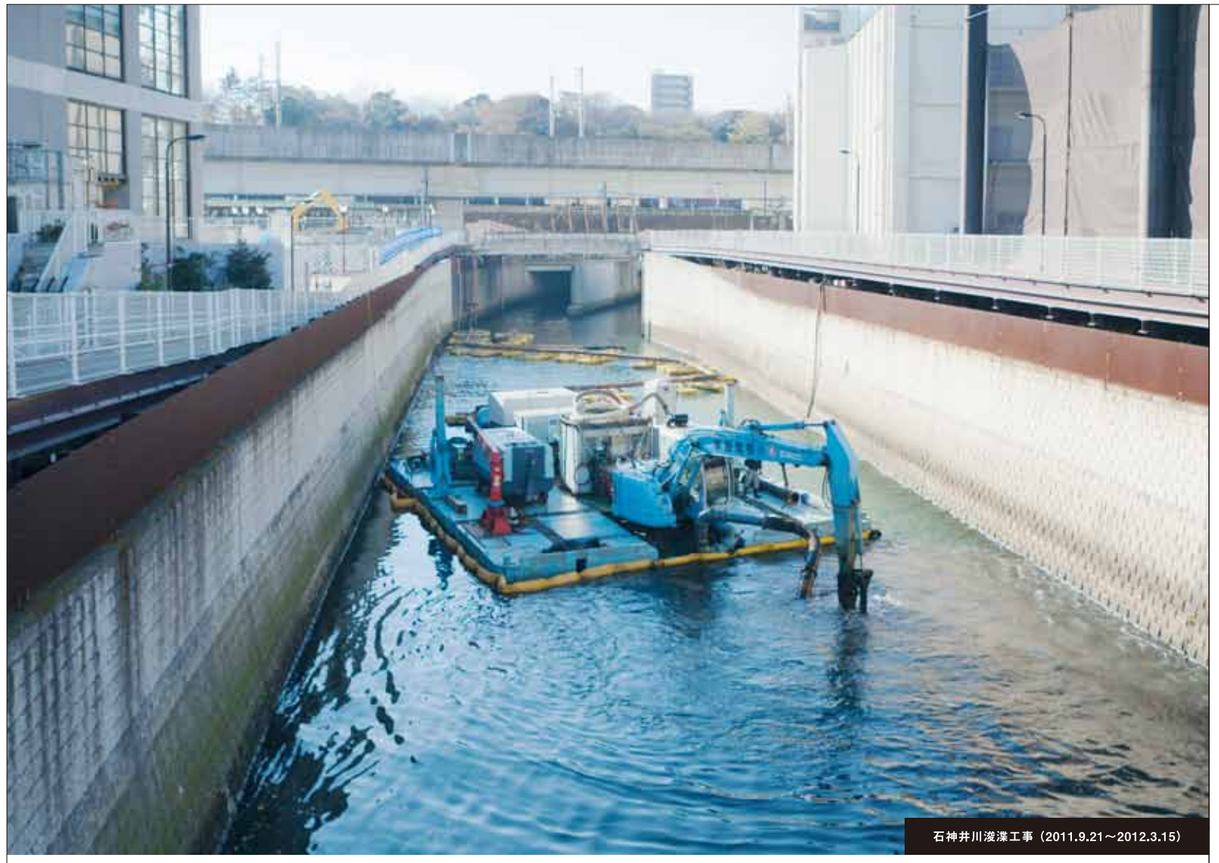
何よりも安全で円滑な工事を行うための準備にも苦労をしたという。発注者は北区役所であるが、ロータリー部分は首都高速道路の管理下であり、河川の清掃や管理は東京都であるなど、工事関係機関が多いことから各機関との工事前の入念なすり合わせにも注力した。

長年、近隣の住民を悩ませてきた悪臭の元を取り除くために、独自の浚渫技術を持つ小柳建設だからこそできる工事で人々の快適な暮らしに貢献を惜しまない。



横を通る電車から見える位置に毎朝掲示している「今日の天気」。

臨時で移設されたタクシー乗り場。


石神井川浚渫工事（2011.9.21～2012.3.15）

【※NETIS（新技術情報提供システム）に登録される、独自の浚渫技術】負圧吸引方式による浚渫・圧送システムで、高濃度の泥土を薄層で吸引しパイプラインにより空気圧送する浚渫工法。比重が小さく、浮遊拡散しやすい底泥を対象とした浚渫において、新規に開発した負圧吸引浚渫装置により直接底泥を高濃度（※含泥率40～80%）で吸引浚渫し、パイプラインにより空気圧送する浚渫技術。

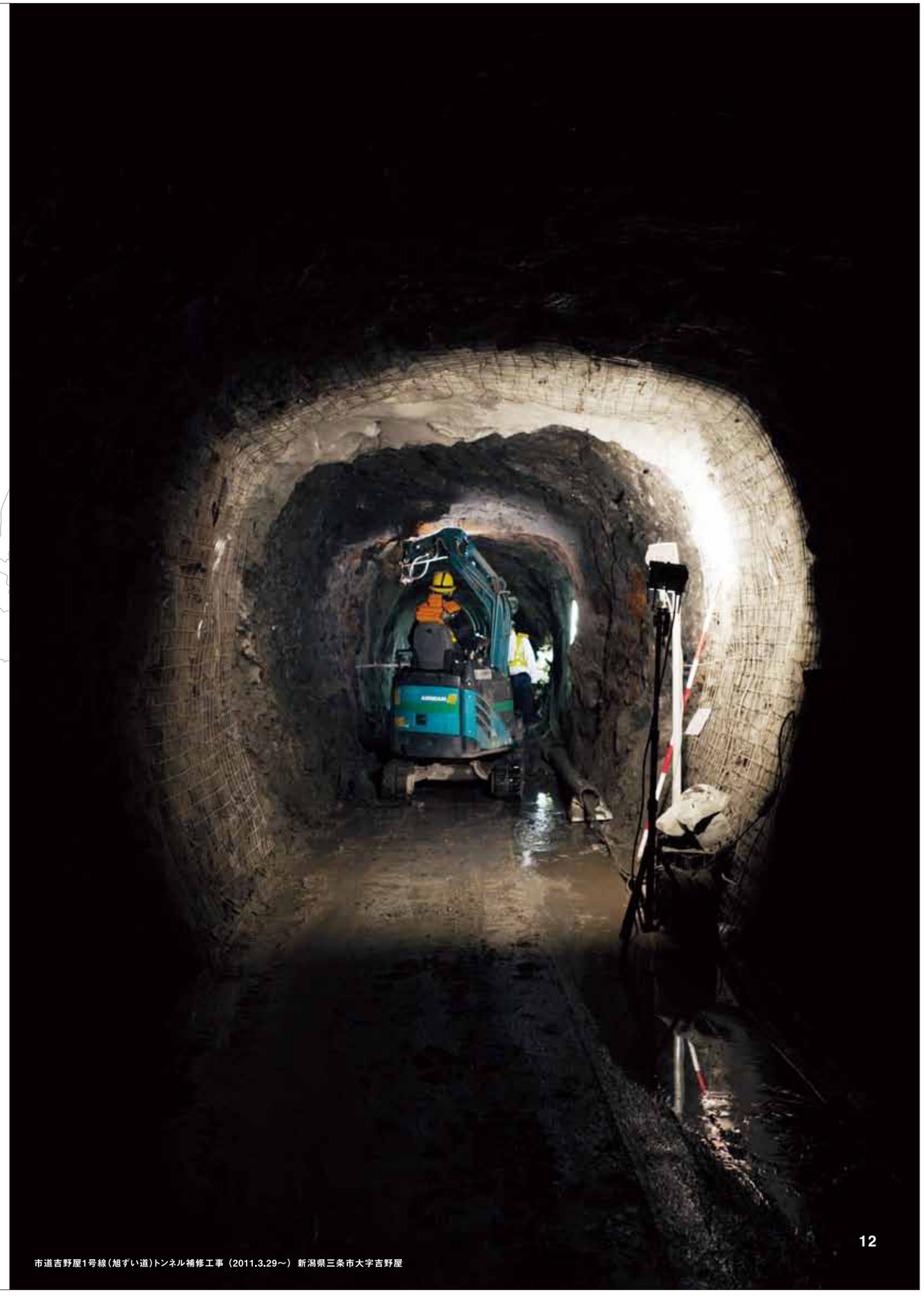
加藤 康之
小柳建設（株） 環境保全事業部 主任

発注者だけでなく、多くの関係機関の方との打ち合わせの段階できちんとコミュニケーションを取るようにしています。例えば今回の工事では、北区役所と関係機関を交えて工事の細かな内容や規制範囲・期間・工事車両の入場台数などを伝えます。関係者や地元の住民の方からご理解やご協力を頂くことも大事な業務のひとつです。

独自の浚渫技術で、市民の悩みを解決する。

船を川に降ろす際にクレーンを置いた場所。

作業ヤードのある場所は、もともとは駅前のタクシー用ロータリーだった。



市道吉野屋1号線（旭ずい道）トンネル補修工事（2011.3.29～） 新潟県三条市大字吉野屋

〇五

市道吉野屋1号線（旭ずい道）トンネル補修工事

毎日使う人がいる。だから工事は1日でも早く終えたい。

手掘りでつくられた狭いトンネル（ずい道）。補修工事も人の手。

トンネルというよりは、もはや洞窟、と形容したほうがいいかもしれない。全長770メートル。むき出しになってゴツゴツとした岩肌。工事用の街灯がなければ、内部は真っ暗な空間だ。1954年、山の向こう側にある集落と農地の管理のために人が手掘りで掘り進めたトンネル。それが少しずつ修理、補正を加えられ、生き残った。現在、集落や農地はほとんどなく、トンネルの向こう側に住んでいるのは神社を管理する家族のみだという。

トンネルは風化が激しく、毎年のように補修工事が行われている。人の手によって掘り進められたこともあり、場所によって高さや幅に大きな違いがある。今回の工事区間は77メートル。むき出しになったトンネル内部をミリ単位でレーダーによって計測し、断面の状態を細かに分析する。その後、表面にコンクリートを吹きつけ、補強のために一定間隔で穴を開け、2メートルほどのロックボルトを埋め込んでいく。「計測したり、穴を掘ったりするのは機械を使うけど、通常のトンネルに比べれば圧倒的に人の手でやらなければならない部分が大きい。その分、時間もかかるから、工事の段取りがすごく重要なんだ」（小柳建設土木事業部課長代理・渡邉彰利）。

内部は軽自動車がギリギリ通れるくらいの空間。一度に部材を搬入することが困難であるため、キメ細かに搬入する段取りを組む必要がある。また、しっかりとした地盤とはいえ、天井や壁から多くの水が流れ出ているので、一度修理した部分も含め劣化が早く、崩落の危険性を常に意識しなければならない。

さらにわずかとはいえ、農地の管理やトンネルの向こうに住む神社の家族の方々が生活用道路としてトンネルを通行する時間帯がある。常に工事日程を共有し、トンネル通行時には工事を一時中断するなど、工事日程の段取りにも工夫を施している。

「たとえわずかでも、このトンネルを使う人がいる限り、1日も早く工事を終えたい」（渡邉）。この日は台風が新潟県内を直撃。しかし工事の手は止まらなかった。

【世界一神社】
トンネルから約1.2キロの山道を登って行くと、「世界一神社」という神社がある。最近はテレビや雑誌でも紹介され、県外から訪れる人も増えているとか。

渡邉 彰利
小柳建設(株) 土木事業部 課長代理

トンネル内の補修工事の最中、7月末の集中豪雨によって、集落側の入口近くの山の斜面が崩落。そちらの復旧工事にも1ヶ月ほどかかりました。向こう側へ抜ける道はこのトンネルしかないので、1日でも早く工事を終えられるよう工事日程を工夫しました。

街に、人に貢献するための社内での取り組み〈1〉

〈接遇研修〉

カタチを覚えれば、心はついてくる。おもてなしの正しいカタチを全社員へ。

「ようこそお越しくださいました！」、大きな声が響く。不定期ではあるが、「接遇」の第一人者、大人気講師の平林都氏を講師として招き、行われる研修。ホワイトスイムに勤務する社員はもちろん、普段、工事現場に出る社員も含め、全従業員を教育している。建設業である小柳建設がなぜ「接遇」に力を入れるのか。それは小柳建設の事業への考え方にある。「数年前から『建設業のサービス業化』を唱えています。それは、昔ながらの「建設屋」とか「土建屋」と言われた建設業のイメージを変えたかったからです。どんな技術者・職人であってもお客様への対応についてはサービス業のように行える環境にしたいんです。奉仕（サービス）の心が伝われば、どんな方でも快く受け入れてくれ、周りを幸福にするはずです」（常務取締役・小柳卓蔵）。研修ではカタチを最も大切にする。お辞儀の角度やタイミング、言葉遣いなどのカタチを実践できれば、心は後からついてくる。平林氏の言葉である。カタチを相手に示せなければ、いくら心がこもっていても、相手には伝わらないからだ。すべてはお客様のために。従業員の教育はお客様の満足度を高め、なにより従業員本人の人間性も高める。素晴らしい従業員が集まれば、素晴らしい会社になると考えている。

〈国土交通大臣表彰〉

地元・新潟での地道な活動はすべて建設会社としての「使命感」と「心」。

２０１１年７月11日。建設事業の振興への尽力、公共の福祉への貢献が評価され、小柳建設代表取締役小柳直太郎社長が国土交通大臣表彰を受賞した。地元の子どもたちへの図書カード寄贈、福島潟でのごみ拾いのボランティア活動、新潟県中越沖地震や三条市での水害などの災害に対する対応など、建設分野に限らず地域貢献の企業としての役割をこつこつと積み上げてきた。また、平成元年に新潟県建設業協会三条支部長に就任以来、小柳直太郎社長は地域の関連業者を「活かして、生かす」ことで守り続けてきた。さらには地元・新潟県内に留まらない全国規模での活動も顕著であった。東日本大震災における東北への災害派遣や、地元の新聞でも取り上げられた宮崎県・新燃岳での火山灰の除去支援など、多くの活動を通して世の中への貢献を遂げてきた。「建設会社として世の中に対して長年こうした活動を地道に行ってきました。そういう『心』の部分が評価されたのかもしれません」（常務取締役・小柳卓蔵）。曲がったことが大嫌い。信念を曲げない。そんな企業姿勢をこれからも貫いていく。

〈図書カード〉

次世代を教育することも社会の使命。本を読むことで人間力を高めてほしい。

保育園から届いた感謝の手紙

『建設会社が図書カードを配っている』―一見、なぜ？と思うかもしれない。小柳建設は数年前から、地元の加茂市と田上町の保育園や幼稚園、小学校、中学校に、毎年１回、図書カードを寄贈している。始めたきっかけを常務取締役の小柳卓蔵はこう話す。「企業として私たちが大切にしていることに『従業員の幸せ』が挙げられます。一方で、自分たちを育ててくれた地域や『世のため人のため』という心も重要な位置づけとし、特に『次世代の教育』に積極的でありたいのです」

企業として、そして建設会社として、世の中へ貢献していくことを「使命」と置いている小柳建設。年に一度、市や町を通して各教育機関へ贈られる図書カードは、感受性の豊かな子どもたちに本を読むことの大切さを伝えたい、という想いがある。「子どもから『ありがとう』という手紙がたくさん届きます。たくさん勉強してもらって、素晴らしい人材となって、地元にまた戻ってきてほしいですね（笑）」と小柳は話す。

〈ボランティアへの参加〉

現場から上がった活動参加への声。地元の環境保全のためのボランティア。

小柳建設では、浚渫（しゅんせつ）工事を請け負っていたこともあり、日本一「オオヒシクイ」が飛来する福島潟の清掃活動に毎年参加している。「うちには『環境保全事業部』という部署があるくらいですからね（笑）。地元の企業として環境への貢献は当たり前であると思います」（常務取締役・小柳卓蔵）。この福島潟の清掃活動への参加は、十数年にわたり自主的に参加していた現場の社員からの提案であったという。他にも、本社のある東三条でもゴミ拾い等の活動を積極的に行っている。活動には主に事務職や事業部の社員が赴いている。近年は、参加者数も増加し、それに比例してゴミは減り、不法投棄もなくなってきている。そして、野鳥や渡り鳥の姿が見られるようになり、すこしずつ良い変化が起きているという。その他にも、小柳建設では環境保全活動の一環として携わった工事現場に花を植える活動もしている。例えば阿賀野川の洪水を防ぐために行われたペーン水制工の工事の時は、川の土手部分に花をスマイルの形に植えた。小柳建設はインフラ整備に携わるだけでなく、自然環境への配慮にも注力していく。

0六 クリオ武蔵新城建設工事

近隣住民の方との付き合い方は、なによりも約束を守ること。

掘り起こすと現れた予想外の解体くず。処理をしながらでも、工期は守る。

南武線・武蔵新城駅の近くに新たに洗練されたデザインマンションが建てられた。クリオ武蔵新城は、新潟に本社を構える小柳建設の東京支店による施工だ。「本工事において特に困難だった点として、震災の影響や高速道路や側道に囲まれていることなどもありましたが、地面を掘り返して現れた廃棄物の処理が挙げられると思います」（小柳建設東京支店係長・柴原喜一）。

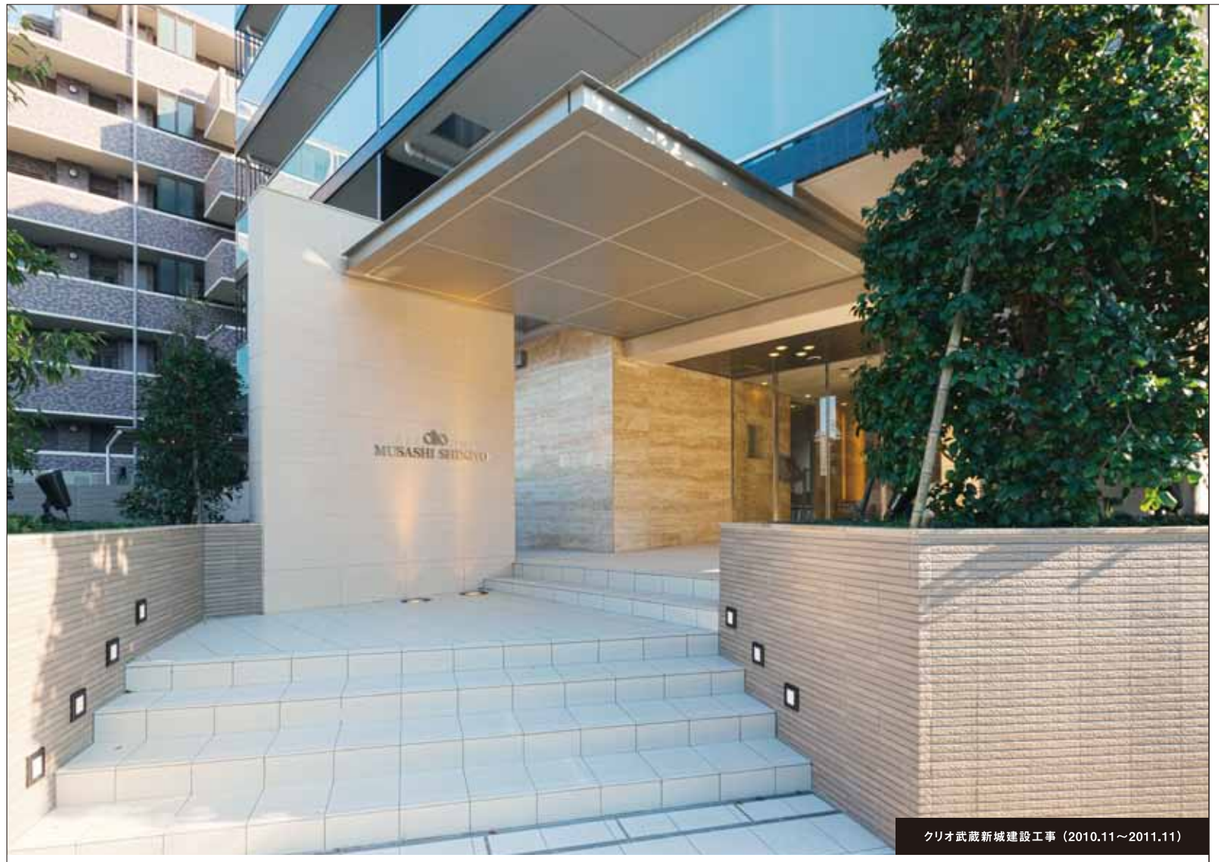
現場の土地の特徴として高低差が目立つことが挙げられた。また、場内の水処理にも時間を割かなければならなかった。そして、何よりも現場の土を掘り返していくと大量の解体くずが現れた。水処理も含めて基礎部分の脆弱さはマンション建設において重大な問題となる。これらの解体くずのゴミの処理に、実に3週間の時間を割いた。しかし、工期は絶対に守るというプライドが柴原にはあった。基礎を固めるための計画を迅速に立て、予想外の出来事にも柔軟に対応することで工期を間に合わせるに至った。もちろん、工事そのものにも小柳建設のこだわりがある。「壁の汚れなら、実際に入居してみればすぐにわかります。でも、私たちがこだわるのは〝見えない部分〟です。壁の中に埋まっている配筋の仕方や、コンクリートの強度、そして垂直・水平・直角にとことんこだわります」（柴原）。

また、クリオ武蔵新城のマンション工事では近隣住民とのコミュニケーションは円滑に進んだ。「今回の工事に限らずいつも心がけているのは、近隣の方には「できること」と「できないこと」を正直にきちんとハッキリさせるようにしています。そして、なによりもそれらの約束を守ることが大事だと思っています」（柴原）。

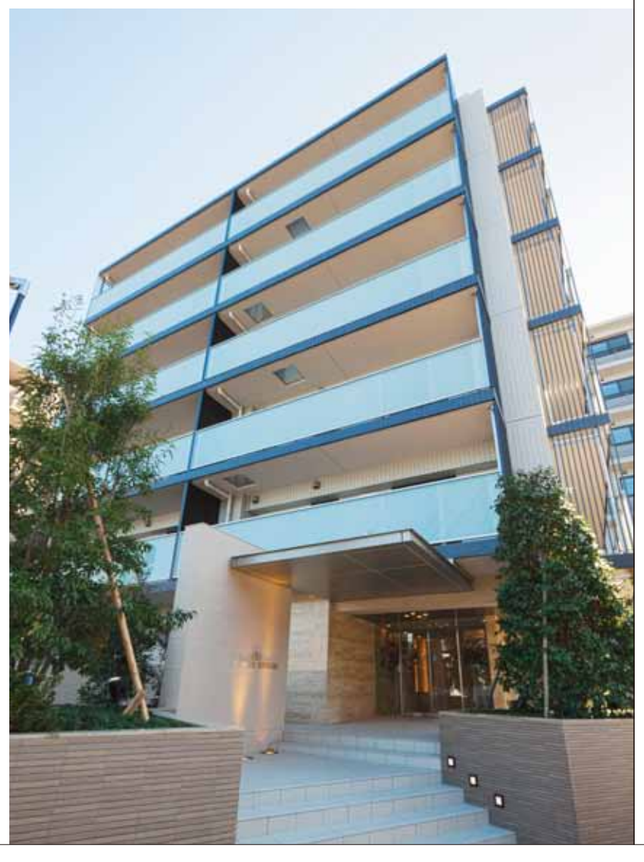
今後の東京支店の展望として、民間と公共を問わずに建築土木事業に注力していきたいという。もともと本社は土木工事に強いため、それを活かして東京支店ならではの都市土木にも目を向けている。

柴原 喜一
小柳建設(株) 東京支店 係長

2010年の9月頃から工事の話があり、その後の着工から竣工までの間、設計事務所やデベロッパーとの折衝から現場の取り仕切りまで一貫して携わりました。一般的に、「マンションづくりは体力」と言われています。53歳の私が最後までやりきれたのは関係者の皆様のおかげです。



クリオ武蔵新城建設工事（2010.11～2011.11）



0七　毛長川河床掘削工事

河川だけでなく、そこに住む人の心もクリーンに。

浚渫（しゅんせつ）工事は、現場以外のところで工事の価値が問われている。

埼玉県草加市と東京都足立区をまたぐ、住宅街に囲まれた毛長川。この河川の環境改善・治水安全の向上を図るための工事を請け負ったのが小柳建設だ。

「県境なので、発注者はもとより、東京と埼玉のそれぞれの関係機関へ工事に関する打ち合わせをしに足を運びました。埼玉県と草加市役所、足立区役所、電力会社、警察等…ですが、浚渫の作業だけではなく、こうした関係機関との調整、打ち合わせも大切な仕事のひとつです」（小柳・横田建設共同企業体毛長川河床掘削工事（その9）現場代理人・志田敏和）。

もちろん、民家に囲まれた工事現場だからこそ近隣住民の方々とのコミュニケーションにも最大限の注意を払った。例えば、工事概要を記した手作りのビラを、一軒一軒のお宅を回って挨拶をした。その数は、２００軒を優に越える。「郵便ポストに投函するだけならカンタンです。でも、顔を合わせるからこそできる信頼感があります。あるお宅では、『昔はこの川で魚釣りをしていたのよ。もとに戻るといいわ』と声をかけてくださり、頑張ろうと思いました」（志田）。

工事内容についてお問い合わせを頂いた近隣住民の方に、できる限りの対応をしたところ、後日その方から「朝早くからおつかれさまです。頑張ってください」という言葉をもらったという。このように地域の環境保全だけでなく、そこに住む人たちへの真摯な姿勢を大切にしている。

また、川のそばに設置した脱水設備も本工事の特徴だ。これは、吸い上げた浚渫土を圧縮して水分を抜き、体積を減らす設備である。これによって、輸送するダンプトラックの台数を減らせ、結果的にはCO_2の削減にもつながるという。河川にも、人間にも、真摯に向き合うのが小柳建設の浚渫工事だ。

すりつけ工を施した床面。段差を埋めることで歩行者・車両に配慮。

毛長川河床掘削工事（その9）（2011.10.14〜2012.3.14）

志田 敏和
小柳建設（株）小柳・横田建設共同企業体
毛長川河床掘削工事（その9）現場代理人

浚渫って、一般的には泥臭いし、汚い仕事というイメージがありますよね。でも、それをやる人がいなくなると、河川は汚くなっていき、自然環境も壊れてしまう。こうした責任を担っているという使命感が私を突き動かしています。

川のそばに設置された脱水設備。
土捨場にそのまま捨てない一手間をかける。

毛長川の浚渫作業に取りかかる吸引圧送船。

住宅街に囲まれた川だからこそ、一軒一軒と向き合った。

JASS-PORT加茂・建設工事（2011.4.18〜7.11）新潟県加茂市

〇八 JASS-PORT加茂

ガソリンスタンドの工事は、難解なパズルだ。

制約の多いガソリンスタンドの工事をスムーズに進める極意。

ガソリンスタンドの建設には、超えなければいけないハードルがたくさんある。例えば、今回の工事の場合、ガソリンを貯めておくための地下タンクは4基。通常、2〜3基のスタンドが多い中、今回は加茂市内でも大きな規模の工事になった。今回の工事期間は85日間と、ガソリンスタンドとしては平均的な工事日数だったものの、消防法で義務付けられている点検は、曜日が限定されて段階ごとに行われているため、工期の遅れなどが許されないシビアな工程管理が求められる。「ガソリンスタンドは敷地内の殆どの構造物が検査対象となる為、どのエリアも工程を遅らせることができません」（小柳建設建築事業部係長・明村浩二）。

ガソリンスタンドは多くの工事会社と工事工程の調整をしなくてはならない。看板会社、油設工事会社、水道工事会社…。どこかひとつの工事が遅れれば、他の会社にも迷惑がかかる。そして期日通りに市役所や消防署からのチェックが受けられなくなる。それだけで全体の工期が延び、オープンにも影響を及ぼしてしまうのだ。

「つくっていく中で施主様から想定外の要望が出ることは当たり前。私たちはそれらを受け止めながら、工期の中でどうしたらできるか考えていくんです」（明村）。

その他、近隣には民家が多く、夜間の工事を控えることも当初から決まっていた。さらに、工事場所は小中学生の通学路。工事車両の出入りなどにも最善の注意を払った。それら無数にあるさまざまな条件を加味して、工事は組み立てられていく。「パズルのように複雑なんだけど、一つひとつやっていけばいい。無理なく、安全に、コストはかけすぎず。これが工事で大事なことです」（明村）。豊富な施工管理経験の中から導き出される・シンプルな極意。ガソリンスタンドというなくてはならない生活施設ができあがる裏側には、施工管理のプロフェッショナルたちの腕と頭脳が生きている。

梶間 秀明
JASS-PORT加茂 店長

大阪のガソリンスタンドからこちらに移動してきました。壁の色を直前で変えたり、スタッフ用の喫煙室をつくって頂いたりと、かなり要望させて頂きましたが、工期通りに終えて頂き、感謝しています!おかげさまで常連さんもでき、順調に営業できていますよ。

〇九 ホワイトスイム感謝祭

新潟の小さな町で20周年。支えてくれた地元の人たちへの「ありがとう」。

いつもは厳しいプール場内が、1日中笑顔であふれた日。

２０１１年で20周年を迎えた小柳建設が運営するスイミングスクール・ホワイトスイム。日頃の感謝を込めて同年10月23日に五泉スクールにて大感謝祭が盛大に開催された。当日のプログラムとして、ホワイトスイムカップ合同記録会（五泉スクールと秋葉スクールの合同記録会）、オリンピック選手による水泳教室、会員様によるフラダンス披露、男性コーチ陣によるウォーターボーイズ演技、成人水中バレー大会、玉入れ&宝探し、そして屋台など。感謝の気持ちを込めて、すべての参加費も無料とした。

「なによりも、来てくださった方たちに楽しんで頂けるように心がけました」（ホワイトスイム五泉スクール副支配人・石田雄一）。合同記録会では、日頃の練習の成果を出すことも目的であるが、飛び込みができないため普段なら記録会に参加できない子どもたちも参加できるようにした。「水泳が上手になるだけでなく、何よりも大事にしているのは、人間としていかに成長できるか。ホワイトスイムの方針はこういう日でも決してブレません」（石田）。記録会では、途中でコーチが飛び入り参加したりと終始和やかな雰囲気で行われた。20周年という節目を迎えたホワイトスイムを振り返って石田は話す。「新潟の小さな町でここまで長い間存在してこれたのは、ご利用してくださる会員様のおかげです。時には事情によって休会される方もいらっしゃいます。でも、時間を経てまたプールに足を運んでくれた会員様もたくさんいます。地元の人たちと一緒に成長してきたスイミングスクールなんです」（石田）。

今後、ホワイトスイムはどんな存在でありたいのか。「成人の会員様にとっては、どんなに年齢を重ねられてもいつまでもお孫さんと一緒に遊べる体力をつけてもらえるようにしたいです。子どもの会員様には、学校では教えてくれない勉強以外の挨拶や礼儀といったことを指導していくことで人間として大きく成長してほしいです」（石田）。

感謝の気持ちを最大限伝えるために日夜準備に明け暮れたスタッフたちの努力は、足を運んでくれたたくさんの人たちの笑顔によって報われたことだろう。

※五泉スクールは、建物の老朽化にともない、２０１２年１月末をもって閉校いたしました。

石田 雄一
ホワイトスイム五泉スクール 副支配人

当日のプログラムづくりや準備の段階では、「どうやったら来てくれた人が笑顔になってもらえるか」ということを第一義に考えました。小柳建設は地元・新潟の皆様に支えられてここまできました。それはホワイトスイムでも同じことが言えます。そのことに感謝しながら、誰からも愛されるスイミングスクールになりたいと思います。

10 除雪

雪が積もれば即出動。年末年始、曜日は関係なし。

朝の通勤渋滞までに除雪する。深夜の格闘がはじまる。

新潟県内は昨年から今年にかけて、26年ぶりの大雪となった。新潟県加茂市の除雪作業は、例年12月下旬〜3月初旬まで。それが、今シーズンは除雪作業のスタートが12月10日。例年よりも少し早かった。さらに、1月は10日から16日まで、連日出動になった。天気が相手のため、出動を読むことは極めて難しい。

「大晦日は出動していました。年末年始も、土日も、雪が積もる限りはいつでも出ていきます」(小柳建設舗道事業部係長・桑原淳徳)。と、当たり前のように笑う。

小柳建設では、除雪作業の担当を決めている。桑原の担当は加茂市内の国道と県道をあわせた約5キロ。除雪作業では通常、前日の17時に三条地域振興局より、待機の指示が入る。そこからは各建設会社の判断で実際に除雪作業に入るかどうか決める。積雪10センチが目安。その判断を日付が変わる時間に行う。ゴーサインが出れば、桑原は重機のある場所に行き、準備を整え、自分の担当箇所へ出る。この時、かならず助手を1人つけるのだと言う。

「夜中の作業で視野が狭くなるので、安全を確保するために必ず2名体制です」(桑原)。除雪はまず、降り積もった雪を道路の側面に積み上げていく。朝の通勤渋滞が始まる7時頃までに必ず持ち場の5キロを終える。その後、道路側面に溜まった雪を遠くへ飛ばしていく。

「難しいのはクルマで踏み潰されて凍った雪を剥ぐ作業。圧雪剥ぎと言いますが、通りやすさを確保する意味でも、なるべく綺麗に剥いであげたい。技術力を磨いていきたいですね」(桑原)。

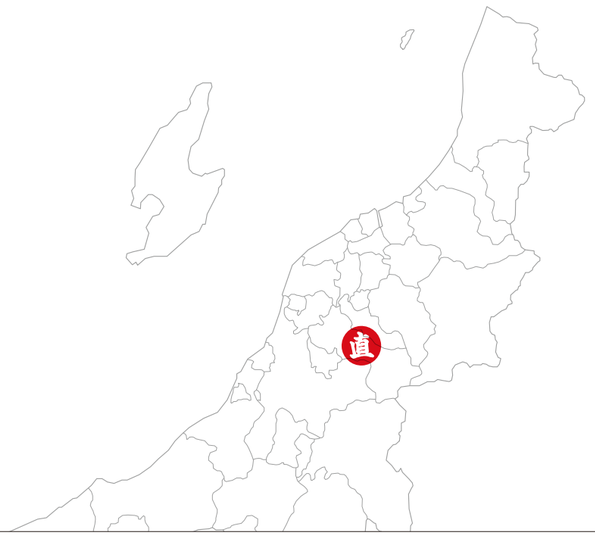
通常は夜中に行う除雪作業も、日中、雪が降り続いていれば、出動することもある。その時、雪かきをする街の人たちから会釈をされると、本当にうれしいと桑原は言う。

「人のために役だっているんだなって」(桑原)。

12月から3月。桑原は雪が降り続ける限り、街へ出ていく。

桑原 淳徳
小柳建設(株) 舗道事業部 係長

今シーズンも、クリスマスイヴもクリスマスも出動しました。家族ですか? 仕事ならしょうがないって、優しく見守ってくれています(笑)。



〈朝礼〉

ビジネス現場の一人ひとりが、小柳建設の代表としての判断ができるように。

毎月1回、小柳建設の県内勤務従業員が一堂に集って行われる「全体朝礼」。内容としては、基本動作（挨拶）の練習から、「使命感」「行動4原則」「品質方針基本理念」「環境方針基本理念」「労働安全衛生方針基本理念」などの唱和、そして代表取締役小柳直太郎社長による挨拶などで1時間強にわたって行われる。定期的に行われるこの朝礼の意義として、常務取締役・小柳卓蔵はこう話す。「ビジネスの現場において、さまざまな場面で判断を迫られる機会があります。そんな時に、どのような判断を下すべきなのか。それは、人間としていかに正しい判断をするかということだと思います。その人間として正しい判断とは、目の前の事象を損得勘定ではなく、「善悪」で物事を判断するということにつきると思います。弊社の行う全体朝礼では社長の「考え方」を月に1回でも学ぶことで、誰もが現場で『社長ならばどう判断するか』『人間として正しい判断とは何か』といった判断基準を学ぶことができる場なのです」（小柳卓蔵）。常務は、社長の考え方を話すことのできない社員が多い企業は、衰退の一途を辿っていくと言い切る。どんなに会社が大きくなろうとも、全従業員のベクトルを統一することで、企業としての基盤を固めていくことができると考えている。

〈障がい者採用〉

やる気さえあれば、働ける。適材適所で雇用に自由を。

厚生労働省が企業に義務付けている障がい者の雇用は、雇用する労働者の1・8％。従業員1000人以上の大企業では、積極的に採用を進める企業もあるが、社会的に障がい者の雇用が進んでいるとは言いがたい。一方、従業員250名ほどの小柳建設では、数年前より積極的に障がい者の雇用を進めてきた。「障がい者でも『働きたい』と前向きに考えている人がたくさんいます」（小柳建設常務取締役・小柳卓蔵）。実際に、障がい等級で一級の社員などが働いている。適材適所でそれぞれの活躍をしている。「仕事は、人生の中でも大きな意味があると思っています。生きがいとなり自身の心を高める修錬の場であると考えられるからです。だからこそ、障がいの有無に関わらず仕事をしたいという熱い想いがあれば、仕事を通じて自己を高めて頂きたい」（小柳卓蔵）。人のために働くのが建設業。小柳建設で働くすべての従業員に、仕事を通して人生を輝かせてほしい。

〈東京工事事務所〉

場所を問わない工事品質のために。東京での工事事務所を設立。

建設業のみならず、東京の多くの物流・製造業の事務所やセンターが立ち並ぶ東京港。関係者からは「建設業界の一等地」と呼ばれるその場所に、飯田橋の東京支店に続いて、東京での事業拡大の一環として建てられた小柳建設東京工事事務所。「東京支店はあくまで支店として東京での営業拠点としての役割を持たせ、一方で東京工事事務所は浚渫工事等、土木工事の事務所として役割を果たしていきます」（小柳建設東京支店副支店長・松下直行）。ここにも、小柳建設ならではの小さな工夫が見られる。2011年の東日本大震災の後、電力不足に見舞われた東京の状況を鑑みて、社長自らのアイデアで風力発電を行うことにした。微力ながらも、有事の備えとして活用していくという。小柳建設の東京進出の旗艦店となるべく、日々挑戦が続いていく。

〈国土交通省顕彰〉

企業は「人」でつくられている。だからこそ、何よりも人を大切にする。

残暑が厳しい2011年9月15日。都内某所にて盛大に開催された「平成23年度優秀施工者・建設産業人材確保・育成対策顕彰」において、国土交通省土地・建設産業局長顕彰を小柳建設株式会社として見事受賞した。当顕彰は、建設労働者の福利厚生の改善面などでの功績があり、他社の模範と認められる企業に対しての顕彰である。小柳建設では、かねてから女性技術者及びシニア層の積極採用を行ってきた。「女性も、施工管理という身体的な差異が生じない業務があったり、女性目線での丁寧で高品質なものを提供できると考えます」（代表取締役・小柳直太郎社長）。また、全従業員を対象にした接遇教育や、労働環境の向上のための社内の和式トイレを洋式トイレとする取り組みなども評価された。「うちには70歳を越えた社員も数名います。いくつになっても働くことで人生は輝くのです」（小柳直太郎）。人を大切にする経営に、これからも邁進していく。

道をつくる。堤防をつくる。
マンションをつくる。
街の土台や景色をつくるのが
建設業の役割だとしたら、
たくさんの自然を
よみがえらせることも、
私たち建設業の使命だと思う。
人のために、
自然のために何ができるか。
とことん考え、
真っ直ぐに、貫いていきたい。

会社概要

社　名	小柳建設株式会社
U R L	http://n-oyanagi.com
本　社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5　TEL.0256-32-0006
創　業	1945年（昭和20年）8月
資 本 金	3億5千万円
事業内容	1. 建設工事の請負、企画、設計、監理、およびコンサルティング業務 2. 不動産の売買、賃貸、仲介およびその管理ならびにコンサルティング業務 3. 住宅の建設および販売ならびに土地造成および販売 4. スポーツ施設、レクリエーション施設、健康増進施設等の保有、賃貸および経営 5. 労働者派遣事業法に基づく労働者派遣業務 6. 前各号に付帯する一切の事業
許可関係	国土交通大臣許可（特・般ー19）第13415号 / 一級建築士事務所 新潟県知事登録（イ）第4396号 宅地建物取引業 新潟県知事（1）第4894号 / 測量業許可（1）ー33094号 ISO9001:2008（品質マネジメントシステム）ISOQAR7276 ISO14001:2004（環境マネジメントシステム）ISOQAR7276 OHSAS18001:2007（労働安全衛生マネジメントシステム）ISOQAR7276OHS001JP

事 業 所

本　社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5　TEL.0256-32-0006（代）
本　店	〒959-1326 新潟県加茂市青海町1-5-7　TEL.0256-52-0008（代）
東京支店	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-9-4　TEL.03-3230-8578
新潟支店	〒951-8052 新潟県新潟市中央区下大川前通二ノ町2230-33-4F　TEL.025-223-8001
長岡支店	〒954-0124 新潟県長岡市中之島4156-8 TEL.0258-66-0007

村上営業所 / 新発田営業所 / 東蒲原営業所 / 新津事務所（環境保全事業部） / 千刈事務所（舗道事業部）
田上営業所 / 燕営業所 / 柏崎営業所 / 魚沼営業所 / 上越営業所 / 岩手営業所 / 宮城営業所
福島営業所 / 茨城営業所 / 千葉営業所 / 横浜営業所 / 滋賀営業所 / 岡山営業所 / 東京工事事務所

健康増進・教育複合施設　ホワイトスイム秋葉スクール　〒956-0017 新潟県新潟市秋葉区あおば通1-6-17　TEL.0250-21-7888

関連会社　株式会社平成建設 / 北陸維持サービス株式会社 / 株式会社エステートコンサルタント

C S R　「BUILT ON」 小柳建設と街の人たちをつなぐ　CSRレポート2012

“BUILT ON”とは～を支える、～の基盤になるという英熟語。建設業は人の生活を支える基盤であり、
人のために働く使命感を持って仕事に携わっていく、という決意を題名に表しました。

使命感

**地域を愛し、地域と共に歩み、地域の繁栄に奉仕し、広く社会に貢献すべく
超一流の信用を軸として世界的な視野でパイオニアとしての道を拓く。**